

妖雲の舞曲

デルフィニア戦記
11

茅田砂胡

中央公論新社



目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地	タイトルロゴ・マークデザイン	カバーデザイン	挿	口	カバーイラスト
図	水野デザインルーム	しいばみつお (伸童舎)	画	絵	沖 麻実也
	斎藤由加				

目次

1	—————	9
2	—————	24
3	—————	61
4	—————	78
5	—————	98
6	—————	117
7	—————	150
8	—————	170
9	—————	202
あとがき	—————	234



カリン◎女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。

ジル◎ベノアの頭目。イヴンを高く評価している。

ポーラ◎ダルシニ家の娘。ウォルを国王と知らずに思いを寄せる。

キャリガン◎ポーラの弟。ティレドン騎士団員。

テス◎ダルシニ家に仕える婦人。

グラハム◎「タウに肩入れする国王を諫めるために」とそそのかさ
れ、国王軍を奇襲で壊滅させる。この戦の後ウォルはパラ
スト軍の捕虜となった。

ダール◎反旗を翻した領主のひとり。

オーロン◎パラスト国王。

ヨアヒム◎オーロンの寵臣。

ゲスケル◎オーロンの忠臣。

ボーシェンク公◎オーロンの実弟。隣国の王を虐殺しかけた罪によ
り斬首。

ゾラタス◎タンガ国王。

コリウス◎スケニア国王。

ヴァンツァー◎ファロット一族。

レティシア◎ファロット一族。

ファロット伯爵◎北の大国スケニアの重臣。暗殺集団ファロット一
族の長。

ルウ (ルーファセルミィ・ラーデン) ◎ラー一族。リィの相棒。

アマロック◎リィの養い親。黒狼だが、人型にも化けられた。

CAST

ウォル (ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン) ◎デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

リィ (グリンディエタ・ラーデン) ◎異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。

シェラ◎リィ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。

バルロ◎国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。

イヴン◎独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの東峰にあるベノアの副頭目。

ナシラス◎ラモナ騎士団長。バルロの友人。

ドラ◎将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

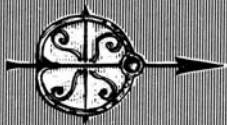
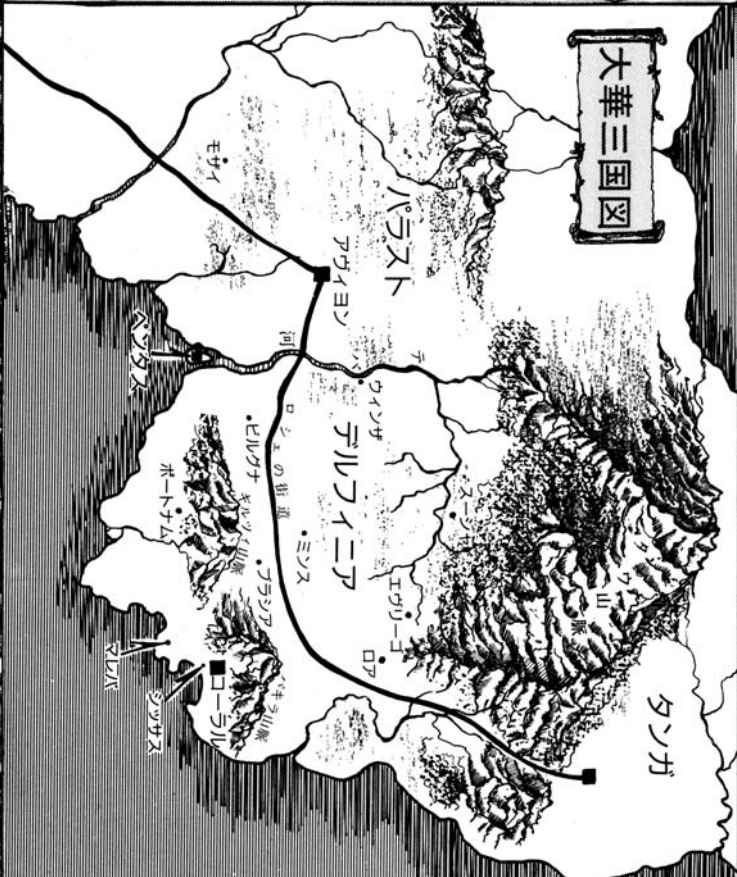
シャーミアン◎ドラの嫡子。女騎士。

ブルクス◎宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

ロザモンド◎ベルミンスター公爵家当主。バルロと恋仲。

エンドーヴァー (ラティーナ・ベス) ◎子爵夫人。ウォルの元・愛妾。ナシラスと密かに恋仲。

大華三國図



妖雲の舞曲

デルフィニア戦記11

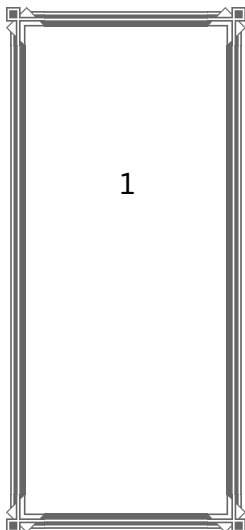
Selfmian War
A RECORD OF THE

一緒に過ごすようになって、人間というものがよくわからなかった。

外見は自分とまったく同じなのに、考えることが理解できない。性質も習慣も理解できない。言葉が通じるので、いろいろ説明も受けたのだが、やはりわからないことが多すぎる。

中でも最たるものが性の問題だった。

「どうして人間は、繁殖はんしよくにつながらない同性同士の性行為を好んで行うのか？」



1

と、訊いたら、たいへんな騒ぎになってしまった。そのくせ大騒ぎをするだけで、誰も自分の欲しい答えを返してくれない。

結局、頼りになったのはやはり人間ではない友達だけだった。事情を話すと、楽しそうに笑っていた。「そりゃあ、きみくらいの歳の男の子にそんなこと言われたら、この人達は穏やかじゃないだろうね。実際に被害にあったのかと思ったんだよ」

「被害？」

「だから。誰か大人の男の人に本当にそういう悪戯いたずらされたんじゃないかって」

「誰が？」

「きみが」

しばらく考え込んだ。

自分は今年で八歳になる。たったの八歳だ。

「人間って、子ども相手にも発情するの？」

「するねえ。たまに」

また首を傾げた。

自分の知る限り性行為の目的は繁殖にあるはずだ。次世代の生まれない同性だの、性的に未熟な個体だのが何故その対象になるのか？

この友達は何を聞いても怒鳴ったり取り乱したりしない。丁寧の説明してくれた。

次世代を残すための本能が単なる快楽へ変化して久しいこと。それに伴って風変わりな性行為を好む異常性愛者も増加していることなど。

どうしてそうなるのかはよくわからなかったが、種族保存の本能は、こと人間に関する限り絶対ではない。それは呑み込んだ。

「そうすると、異性でも同性でもいいって言う人はどうなるのかな？」

「それはただの物好きか、単なる節操なし。本人に言わせると寛容な自由恋愛主義者。ただし、子ども相手の性行為は犯罪だから、禁止されてる」

「だって、具体的にどう違うの？」

「大人の分別と良識を持った人達の合意の上で行わ

れるものなら、犯罪ではない。子どもを相手にするのは児童虐待だから、犯罪である。最近はそういう考え方みたい」

「昔は違ったの？」

「らしいね。不毛な行為だから同性愛は犯罪だって言われて、ずいぶんひどい目に遭ったみたい。今もどうしても認められないって言う人もいる」

「そこがわからないんだ。どうして同じ一種族で、そんなばらばらな反応を示すのかな？」

「本能とは関係ないんだよ。性格だと思えばいい。きみの同族にだって頭のいい狼、優しい狼、気の弱い狼、根性の悪い狼、他にもいろんな性格の狼がいるはずだ。それと同じように考え方の違いとしか言えない」

「ルーファは？」

「うん？」

「認められるほう。認められないほう？」

「同性愛を？ 児童虐待を？」

「両方」

真顔で訊いた。自分にとってはどちらも異常だ。

「同性愛に関しては、本人達が納得してて幸せなら、他人があれこれ言う筋合いじゃないと思うな。でも、弱い者いじめはよくないと思う」

なるほどと思った。

理解はできないが、ある程度は納得した。

本人達の合意があれば同性同士の性行為でも可。

子どもを性行為の対象にするのは弱い者いじめであるから、不可。

新たに得た知識をそう整理した。

「じゃあ、むりやり性行為を強要するのは？」

「それはもう間違いなく犯罪」

「大人でも、男女間でも、同性同士でも？」

「ぜったい、だめ」

少し安心した。それは自分の倫理とも合致する。

ところが、つかみどころのない友達に独り言のように付け加えた。

「まあ、一応そういうことになってはいる」

「いちおう？」

ひどく驚いて問い返すと、海の色の眼がくすりと笑った。

「ごめん。話がややこしくなるね。つまり、人間はね。自分で決めた決まりを破るのが好きなんだよ。駄目だと言われていることほど、やってみたくなるらしい」

ため息が洩れた。

それでは人間社会では何が正しくて、何が正しくないのか。何が守るべき掟おきてなのか。

「きみが決めればいい」

「……」

「いやだと思ふことはそう言えればいい。不愉快だと思ふことも、腹が立つことも、許せないことも」

思わず友達ともの顔をまじまじと見つめてしまった。

恐ろしく傲慢ごうまんに聞こえる台詞せりふを吐きながら、その口調は淡々として、その顔は真剣そのものだ。

急に困ったようにこつちの顔を覗き込んでくる。

「エディは可愛いからね。気をつけたほうがいい」

「かわいい？」

「そう。人間はかわいくて綺麗な子が好きだから」

「きれい？」

呆然と繰り返した。

水に映る姿を見るたびに、何てみともない姿をしているのかと何度嘆いたかわからないのに。

毛皮もなければ尾もない。牙さえない。のっぺりした変な姿を見る度に、まともな、立派な姿の仲間達が羨ましくて仕方がなかったのに。

「狼の間ではそうだろうけど、人間の間ではきみはきれいでかわいいよ。こんな金髪も、こんなに深く澄んだ緑の瞳も、滅多にあるもんじゃない。天使か妖精のように愛らしいって、きみを見た人は間違いないよ。ただ、黙って座っていればって厳しい条件がつくけど」

寶石のような青い瞳が悪戯っぽく煌めいている。

「鼻息の荒い男の人に押し倒されたあげく、お前が誘ったんだ、なんて言われたくないでしょ？」

自分は思いきり顔をしかめたと思う。

「よくわかんないから訊くけど、そういう時は多少荒っぽく反撃してもいいの？」

「だから、それはきみが決めることだ。犯されてもいいと思うんならじつとしていれればいい。いやだと思ふんならそれなりに何とかするんだね」

「わかった。何とかする」

「その時は多少、手加減して。暴行されそうになつたので殺した、じゃあ、過剰防衛できみが犯罪者だ。殺すんならばれないようにやっつてね」

おだやかな表情のまま、物騒さわまりないことを平然と言う。

それはいつものことなのだが、何だか気になって、訊いた。

「誰かに犯されたこと、あるの？」

八歳の子どもが二十歳前後の青年に訊くにしては

変わった質問だが、この友達は怒ったりしなかった。

形のいい唇くちびるに微笑を浮かべた。

「男の人に？ 女の人に？」

「両方」

訊くほうも真剣ならば、答えるほうも負けず劣らず真剣だった。

「男の人には——ないな。それこそ鼻息を荒くした人に押し倒されたことなら何度もあるけど、みんな途中でやめてしまふ」

「——？ 普通、そこまで性衝動に駆られた雄って、目的を果たすまで止まらないよ？」

「なんだけどね。服を脱がせて足を抱えようとするあたりで、怖くなるらしい」

「こわい？」

意外な言葉だった。不思議に思って横に座った友達を見上げると、少女のような顔でにこりと笑った。「だいたいその辺までくるとね、自分が押し倒ばくぜんしているものがどうも何か違う、何か変だつて、漠然と

わかるらしいね」

「それで、やめちゃうの？」

「うん。大抵ぎゃあつて叫んで、逃げちゃう」

「ぎゃあ？」

また、穴が開くほど相手の姿を見つめてしまった。そよ風に髪をなぶらせている友達の姿は、自分の眼から見ても充分に美しかった。表情は優しく、口調も穏やかで、近くにいるといい匂いがする。姿を眺めていることが楽しいとさえ思う。

手を伸ばして髪を撫でてみた。指の間をさらりと流れる感触が気持ちいい。白い肌にさわってみる。

磨みがき上げたようになめらかでしつとりと吸いつく極上の手触りだ。顔を近づけて頬ほおを舐め、唇を舐め、鼻の頭や顎あごの辺りを軽く噛んでみた。

「どこが怖いのかな？」

くすぐったそうにしながら、されるままになっていた友達は、おもしろそうに笑っている。

「だってエディは、ぼくが自分と違う生き物だつて

知ってるでしょ？」

「そりゃあそうだよ。ぼくは狼の変種、ルーファはラー一族じゃないか」

実際、自分とこの友達に共通点があるとしたら、互いに人間以外の生物であるというところだけだ。

自分には手を使わずにものを動かすことも、空を飛ぶことも、姿を変えることもできない。

自分の養い親も人型と狼型の二つの肉体を持っているが、その比ではない。男性型、女性型、動物型、他に何着も着替えがあるらしい。

比べると自分が持っているのはこのみっともない身体一つだ。それが普通だと養い親は言うのだが、だとしたら普通とはずいぶんつまらないことだ。

「そういうの知っていて平気で話すし、さわったり舐めたりするわけでしょ？」

「いやだった？」

「全然」

あっさり首を振って、真顔になる。

「あのね。エディ。大事なことだからよく聞いて。

ぼくはきみが人間ではないと知ってる。姿形は同じものでも中身は全然違うんだってわかってる。でも、人間にはそれがわからないんだ」

この言葉が自分の頭に染み込むまでにはかなりの時間がかかった。

「きみは異種族の間にたった一人にいる。できるだけ衝突を避け、当たり障りなく過ごそうとしている。もちろん彼らとうまくやっていくためにはそうする必要はあるんだ。だけどそれは彼らがきみを人間として扱うことでもある」

「……」

「さっきも言ったけど、きみはきれいで、かわいい。いずれ恋愛関係は避けて通れない問題になるはずだ。単に欲情するだけの人もいれば、真剣に思いを寄せ、人も現れるだろう。そういう人達は、自分がなぜ、きみの恋愛の対象にならないのか、なれないのか、わからないんだよ」

盛大な舌打ちが洩れた。

こちらが自分らしくふるまえば『化け物』であり、仕方なく合わせてやれば問答無用で仲間扱いとは、身勝手にも程がある。

「それ、話して理解させることはできない？」

「どうやって？ どう説明したって納得しないよ。きみは彼らと同じ姿をして、同じ言葉を話している。違う生き物だなんて思うはずもない」

「でも！ ちょっとでもほくと話をすれば、すごく……つまり、変だつてわかるはずじゃないか！」

「普通はそうかもしれないけど……惚^ほれてしまえば痘痕^{あはた}もえくぼつて言うくらいだからねえ。何をどう力説したつて聞きやしないつて」

何やらしみじみした口調である。

「ほくももう面倒くさくなつてさ、一度おつきあいして気がすむんならどうぞつて思つて、寝転^{ねころ}がつてただけど、そしたら肝心なところで『ぎゃあ！』だもん。しらせるよ、あれ」

「それこそ叩きのめしてやればいいじゃないか」

この友達を『弱いものいじめ』の対象にしようとする人間には怒りを通り越して敬服する。外見こそ華奢^{きゃしゃ}で弱く見えても、にっこり笑いながら、大の男の首を片手でへし折るのに。

「でもねえ。そのくらいで殺すのはかわいそうだよ。ほくだつて後味悪いもん」

「こっちの意志を無視するのが、そのくらい？」

驚いた。不愉快でもあつた。自分にとつてそれ以上の犯罪はないのだ。

殺さない程度に反撃すればいいと訴えると、苦笑して首を振つた。

「きりがないんだよ。一人や二人じゃないんだから。ほくが下手に力のあるところを見せると、とたんに『化け物！』だし、騒ぎになるのは困るし……」

「でも、そんな連中の好きにさせるのはだめ！」

思わず声が強くなつた。

少し明るさを増した碧い眼が笑う。

「この身体はほくにとつてはただの容器いれものなんだよ？
必死になつて守るようなものじゃない」

「でも、だめ」

きつぱり言うくと、ますます楽しそうにすり寄つてきた。実は並んでバルコニーの欄干らんかんに腰を下ろしていたから、足下は宙ぶらりんだ。

座つたまま、止まり木に止まつた鳥が横歩きをするように器用に距離を詰めて、肩の辺りにのしつと体重をかけてくる。

「どうして？」

「でかい図体ずうたいで懐くなつてば！　だめだと言つたらだめなの！」

「だから、なんで？」

「ぼくがいやだから」

これまたきつぱりと言いつつ切った。

後で考えると、ずいぶん押しつけがましいことを言つたと思うのだが、その時は真剣だった。

「今さつき不愉快なことはそう言えつて言つたじゃ

ないか。そういう態度はほくには不愉快だ」

「だから、どうして？」

堂々巡りである。

少し考えて、手を伸ばした。興味津々の顔をしてる友達の頬を思いきりつねつてやる。

「いたた……、痛いって！」

「ほら。ただの容器つて言つたつて、つねられたら痛いでしょ？　切られたら血も流れる」

「そりゃあ……」

「ぼくはラーじゃないからどうしても自分を基準に考えてしまう。同じことをされたら、ぼくだったらとてもじゃないけど我慢できない。——こんなこと言う人と人間と同じものになりさがるようだけど……、いやなものはいやなんだ」

この友達にとつて肉体は単なる衣服でも自分にはそうではない。身体を傷つけられることは自由を奪われること同様、『自分』を侵害しんげんされることだ。

うまく説明できたかどうか自信はないが、友達は

自分の背中から肩を抱き込み、顔をすり寄せてきた。
 「それじゃ、今度強引に迫られたら、丁重にお断りしたほうがいい？」

「うん。そうしてくれると嬉しい」

「じゃあ、そうする」

「約束する？」

「する」

何が気持ちいいのか、自分の金の頭に懐いたまま動かない。

端から見ると、それこそ児童虐待の現行犯と言われそうな構図だった。少なくとも、八歳の子どもを大事そうに抱きしめている美青年の図は充分異常だ。

「——あのねえ、エディ。ほくも一つお願いしてもいい？」

「なに？」

首を抱く手に少し力がこもった。

「同じことだよ。もう少し積極的に自分を守って」
 意味がわからなかった。

不思議そうに見つめ返すと、心配そうな碧い眼とぶつかった。ひんやりした手がそっと頬を撫でる。

「きみの身体は刃物で簡単に傷がつく。傷を負えば回復にひどく時間がかかる。身体の一部を失っても修復できない。最悪の場合、この身体が活動を停止したら、きみも死んでしまう」

生き物は普通そうだと言いつ返し返そうとして、相手があんまり真剣な眼をしているので、呑み込んだ。

「きみはいつかは死ぬ。それはよくわかってる。わかってるから、できるだけ『いつか』の話にしておいてほしいんだ。何も百歳まで生きてほしいなんて無茶は言わないよ。ただ……死に急いだりしないでほしいんだ」

支離滅裂な言葉だが、意味は何となくわかった。

命を粗末にしているつもりはない。自殺する気もない。ただ、自分は仲間の死を何度も見てきた。

物心ついたときから死は常に自分の身近にあった。特別なものでも忌むべきものでもなかった。

命あるものはいつかは必ず死ぬ。自分も含めて。

「ルーファ」

「なに？」

「ルーファは、死ぬの？」

この問いに友達は困ったような顔になったと思う。

「それは、難しい問題だね……。とても、難しい」

「死なないの？」

「わからない」

「……」

「ぼくの一族は確かに、ずいぶん長生きだ。身体が滅んだくらいでは死なない。それも確かだ。だけど、この意識が消えてなくならない保証はどこにもない。何を指して生きていると言うのか、死とは何なのか、身体がなくなっても意識は残るぼくの場合、魂とは何なのか、『ぼく』とは誰なのか……そこからまず考えなきゃならない」

「……」

「きみは自分が誰なのか、考えたことがある？」

「名前はエディ・リイ。狼の変種で、アマロックの血のつながらない息子で、ルーファの相棒」

「それだけ？」

「他に何かいるの？」

きよとんとして尋ねた。

吸い込まれそうな碧い瞳が見つめ返してくる。

きれいな色だといつも思う。

極北の白々と凍りついた暗い青でもあり、南国の眼の覚めるような華やかな紺碧こんぺきであったりもするが、基本的に海の色だ。

答えないので、こちらから訊いた。

「名前は？」

「ルーファセルミイ・ラーデン」

「歳は？」

「十五。ぼくが七歳の時にきみが生まれてるから」

「でも、十年以上前からその大きさなんだよね？」

父親がそう言っていた。あいつは全然歳を取っていない。初めて会ったときも今と同じ二十歳前後の

姿だった。そのくせ大真面目な顔をして、半年前に生まれたばかりだと言いやがった。

永遠の若さと美しさを望む女どもや、不老不死を夢見る権力者の馬鹿どもが知ったら、そりゃあもう眼の色を変えてとつつかまえようとするだろうな。

笑いながらそんなことを話していた。

実際、自分が初めてこの友達に会ったのは二歳の時だが、その時から全然変わっていない。

当の本人は、子どもの姿では人間社会では不自由だから、このくらいに調節しているのだと言う。

「エディが二十歳になったら、一緒に歳を取るよ」

「うわあ。それじゃ、あと五十年もしたら、大変だ。白髪になって、しわしわで、背中が曲がって……」

「六十前でそんなになるかなあ？」

「なつたらおもしろいじゃない。それで、やつぱり二人でこうやって欄干に止まってさ。お茶飲んだり喋ったりするの」

「その歳でそんなことしたら危ないって。だいたい

今みたいに飛んだり跳ねたりなんかできなくなるんだから」

「うーん。それはちよつといやかもしれない」

他愛のない会話だった。

自分の望みも同じだった。死ぬまでずっと永遠に、なんて言わない。ただ、時々はこうしていらればいいと思った。

心の優しい、心配性のこの友達は、自分が誰かに危害を加えられることを案じている。

考えすぎだとも思ったが、育ての父とこの友達以上に大切なものは何もない。その言葉どおりにしようと思った。

自分自身を守ることに最大限努力すること。

こちらが礼儀正しくふるまっているにも拘らず、不当な侮辱や暴力を加える輩は決して許さず、必ず報復すること。

仕返しという発想はその時の自分には理解できなかった。ずいぶんきついことを言うものだった。

しかし、それから一年もたたないうちに父親が惨殺された時、思い知った。

アマロックは何もしなかった。

家畜を襲うことも、もちろん人間に危害を加えることもしなかった。彼らに近づくことさえなかった。

目立って大きな真つ黒な毛皮だから、絶好の標的だから、自分たちに害を加えるかもしれないから、殺したのだ。

涙さえ流れなかった。自分はわずか九歳だったが、はらわたが煮えくり返るとはどういうことか、脳天まで怒りが突き上げるとはどういうことか、その時、理解した。

永遠の呪いと復讐を誓った。

人間など一人残らず殺してしまいたかった。

「それじゃあ人間と同じだよ」

アマロックはルーファのたつた一人の親友だった。ある意味、自分以上の衝撃と悲しみに打ちのめされていたに違いないが、青ざめた顔で制止した。

「どこが？ 何の力もないくせに、妙な武器をひねくり回すことだけ覚えるから、自分たち以外の生き物ならおもしろくで殺してもいいと思ってるから、だからアマロックは!!」

「人間は人間もおもしろくで殺すよ」

無機質な、無感動な声だった。

手だけは熱かった。自分の両肩を掴んで、そつと揺さぶった。

「エディ。聞いて。きみはもう直接の敵は討った。実際にお父さんを殺した連中はみんな倒したんだ。これ以上はだめだ。やっちゃあいけない」

「だって、約束させたじゃないか！ 不当な暴力は許すな。復讐しろって！」

「そうだよ。そしてきみはそのとおりにしたんだ。わかるね？」

父の墓の前で自分たちはしばらく睨み合っていた。小さな弟を守るために、身を響めていることしかできなかった。人間どもが上機嫌で、いい獲物が捕

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。